http://decfamily.p1.bindsite.jp/2018/

We 35R

No.463　19/01/18

植物に学ぶ

肉が好きな人は多いだろうが、その肉がどのようにしてつくられているのかを遡れば、植物に行きつく。つまり、飼料である。もちろん、私たちが食べている野菜、果実、穀物などは植物そのものであるわけで、こう考えていくと、今私たちが食べているものは、そのすべてが植物によって賄われているといっても過言ではない。植物は、その他、もちろん二酸化炭素濃度の調整の働きをしたり、エネルギー源となったり（化石燃料、バイオエタノール、バイオディーゼル燃料など）するわけだし、それ以上に、私たちの生活をとりまいて環境（風景）をつくっているわけで、そこに心の支えを見いだす場合もあるわけで、こう考えると、植物たちが私たちの生活を支えてくれているといえるだろう。

＊

ソメイヨシノのはなやかさは、多くの人々の心をとらえ、人々の気持ちを明るく高揚させます。しかし、このはなやかさの陰で、この植物が一年をかけて開花の準備をしている努力には、あまり目が向けられていません。開花する前の年の夏につくられたツボミは、秋に越冬芽に包まれ、冬の寒さを感じて目覚め、春に暖かくなると、開花するのです。ひと花咲かせるためには、厳しい寒さ、つまり苦難の時期を体感することの大切さを心得ているのです。

＊

まるで、明日からの試練に挑む君たち向けの言葉のように思えるが、書いたのは甲南大学名誉教授の田中修先生。（『學士會会報』No.934 2019年１月）　田中先生のご専門は「植物生理学」である。この学問、先生の説明によると

「種子が発芽して、芽生えが成長し、花が咲き、実がなって、植物の一生が終わります。その生涯に、植物の身体の中でどんな仕組みがはたらいているのかを研究する学問です。つまり、”植物の生き方”がテーマになります」

ということになる。「植物の生き方」と言われても、今ひとつピンと来ない部分もあるが、前掲の引用文を読むと、何となく分からないでもない気もする。そんな「生き方」をいくつか田中先生の文章から引用してみよう。

＊

ヒガンバナは、横並びの競争を避けて生きるヒントをくれます。この植物が葉を繁らせるのは、他の草が姿を消す冬です。日差しは弱くても、冬の野や畦には、競争相手がいないので、生育する場所を独占し、たくさんの光を浴びて、多くの球根をつくることができます。他の植物と生育場所を奪いあう競争を避けているものの、決して負け組ではなく、旺盛な繁殖をしています。他の植物とむだな横並びの競争をしないだけです。

イネや芝生は、水が十分に与えられるとあまり根を生やしませんが、逆に不足すると水を求めて根を生やして強く成長します。ミズナスでは、しばらく水が断たれ、そのあとにたっぷりの水が与えられると、おいしい果実が実ります。人間も甘やかされるとダメになるので、逆境をチャンスに変える生き方は見習うべきものです。

＊

「見習」って？小さな逆境を乗り切ろう。